新型インフルの陰に隠れ…

シャーガス病 対策先送りに

新型インフルエンザの感染拡大が続いているが、世界中で協力して対策を考えなければならない病気はデング熱やコレラなどほかにも数多い。そのひとつが、中南米などで毎年数万人が死に至るシャーガス病。ところが、その治療薬開発を促す提案が、先月の世界保健機関（WHO）年次総会では議題から外されてしまった。（ジュネーブで、清水俊郎）

中南米で流行 年数万人が死亡

「ニューヨークや東京の新型インフルエンザの問題も大事だけれど、途上国ではもっと多くの人たちが、先進国ではほとんど知られていない病気で亡くなっているのよ」。ジュネーブに本部のある民間非営利団体「顧みられない病気のための新薬開発イニシアチブ」（DNDi）のサマンサ・ポルトンさん(四〇)は憤っている。

ことしのWHO総会は、九日間の日程が開幕前に急きょ五日間に短縮された。加盟百九十三カ国の政府の保健担当者を「各国の新型インフルエンザ対策のため少しでも早く帰国させる」（WHO事務局）との判断だった。

その結果、議題が絞り込まれ、中南米のボリビアとスリナム、バルバドス、アジアのバングラデシュの計四カ国が共同で用意していたシャーガス病対策案の提出が、来年の総会まで先送りされた。

シャーガス病の初期の患者には治療薬があるが、慢性期の患者には今のところ特効薬が存在しない。ボリビアなどは有志国から出資を募り、研究者向けに賞金付き表彰制度を創設して新薬開発につなげる考えだった。

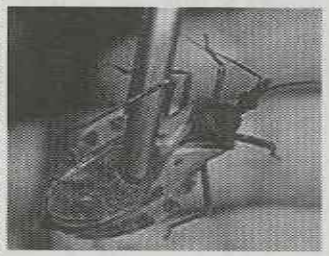
「節目の年なのに」と悔しがるのは、総会に参加した国際緊急医療援助団体「国境なき医師団」のアレクサンドラ・ヒュンパーさん(三一)だ。シャーガス病が発見されたのは一九〇九年。提案は、ちょうど百周年を機に先進国での理解を深める狙いもあった。

総会では、このほか世界で計五億人が感染しているB型、C型肝炎の議論も先送りになり、非政府組織「世界肝炎アライアンス」が抗議声明を発表。

エイズやコレラ、デング熱など多くの命を奪う感染症の存在も念頭に置いた上で、チャンWHO事務局長は総会での演説で「私たちは世界に数多くの病気があることを忘れない」と述べた。

製薬工場でシャーガス病治療薬などを手に取るベネズエラのチャベス大統領＝EPA・時事

シャーガス病 クルーズ・トリパノソーマという寄生原虫が吸血性昆虫のサシガメ＝写真、国際協力機構（JICA）提供＝の媒介で人にうつり、血液中で増殖して引き起こす難病。サシガメは泥、わらなどでできた粗末な家の天井や壁のすきまに生息。夜間に床に下りて人の肌にかみつき、その微細な傷などから原虫が人の血液に潜り込む。発症までに数年かかり、心臓や消化器の疾患で死に至る。母胎から胎児に感染する場合もある。DNDiによると、中南米では推定1800万人にトリパノソーマが寄生している。



貧困層の病気

ボリビア政府の代表 アンジェリカ氏

「シャーガス病は貧しい人の病気だから、てこ入れしなければ製薬会社は力を入れてくれない。治療薬の開発には先進国を含めた国際協力が欠かせない」と訴えるのは、WHO総会のボリビア政府代表ナバロ・アンジェリカさん(36)だ。

アンジェリカさんの祖父(73)と祖母(65)も20年前に発症し、心臓が衰弱。若いうちに仕事を辞め、空気の薄い標高3000㍍の首都スクレの郊外で、頭痛やめまいに悩みながら外出も自由にできない毎日を過ごしている。

テコ入れ必須

「来年のWHO総会では、治療薬開発促進の提案を必ず通したい」とアンジェリカさんは力を込めた。